

## 留学生センター留学生相談室205号室

松浦 まち子

### はじめに

2004年度は、私が室長を併任する「名古屋大学留学生相談室」(以下「留学生相談室」と記述)が実質的に立ち上がり、どのように運営するかが課題であった。留学生センターの相談室と「留学生相談室」の業務の棲み分けの必要もあった。内容的には、留学生に関わる一般的な相談を受けながらも、主として国際理解教育への留学生派遣や地域の人々との交流、さらに留学生家族の日本語コース運営を「留学生相談室」の業務とし、それらに関する日常業務は非常勤職員に委ねた。2005年度中にはメンタルヘルス分野を専門とする助教授1名(年俸制、任期付)の着任が想定されており、それによって留学生の精神的適応への支援体制も整備できる予定である。時間配分は、留学生センターの相談時間を月・水・金とし、「留学生相談室」は火・木としたが、実際には業務増加に伴う会議等で相談室を不在にすることもあり、相談業務に従事する時間確保が困難になっているのが実情である。この年報には「留学生相談室」で受けた相談も含めて記載する。

また、2004年度7月から独立行政法人日本学生支援機構(JASSO)の留学生地域交流事業「児童養護施設の児童と留学生のこころの交流と思い出づくり」の企画に関わり、JASSO職員とともに留学生を巻き込んで実施した。これは「子どものこころ」をキーワードとした社会性のある有意義な事業であり、2005年3月、JASSO名古屋支部から報告書が刊行された。

その他、2004年度の特徴的な改革としては、国際交流会館付き留学生相談主事として就任した1993年以来、毎年4月と10月に行ってきた国際交流会館での入居オリエンテーションを10月から担当職員とチューターに全面的に委譲した。さらに、同じく4月と10月に行ってきた新入留学生オリエンテーションにおける生活上の注意事項説明の担当を、2005年度4月から留学生教育交流委員会委員に委譲したことが挙げられる。

### 留学生相談業務と相談内容

#### 【指導教員・進路】

博士後期課程6年目の留学生が、学位取得に関して文部科学省へ直訴の手紙を送ったため、その内容に関して真相究明依頼があり当該部局の留学生担当教員に調査を依頼した。また、研究に行き詰って研究に集中できないが、期待してくれている指導教員にそのことを言えずに苦しんでいる留学生から相談があり、学生相談総合センターと連携して助言した。留学生は勇気を出して指導教員に窮状を話し、さらに相談室担当者からも重ねて留学生の状況を説明し先生の理解と対応で救われた。進路関係では、短期交換留学生から大学推薦を含む名古屋大学への再留学の相談や日本語・日本文化研修生から10月以降研究生として名古屋大学に残るための手続きの問い合わせなどがあつた。また、国費留学生から協定校への1年間の留学希望があつたが奨学金支給との関連を説明し時期尚早と断念させた。

#### 【日本語・勉学】

学位記の公印証明の手続きについて問い合わせがあり、外務省証明班を紹介した。また、博士前期課程2年生の学生から論文執筆中にパソコンを修理に出すことになったためパソコンを借りたいと相談があつた。留学生のチューターに指名されたが、どのような役割を期待されているのか尋ねてきた日本人学生がいた。チューター制度に関しては、名古屋大学院生協議会(名院協)から総長交渉でチューター制度の整備要請があり、留学生教育交流委員会およびそのWGでチューター制度を検討しているが、2005年度に向けては4月の新学期開始とともに、新入留学生にチューターをつけることになった。

#### 【一時帰国・帰国】

帰国に際して荷物の発送の相談があり、郵便局から送ることを勧めた。また、留学生の帰国途中、中国で

乗り継ぎトラブルが起きて名古屋へ送り帰されるという事態が生じた。関係者の対応で、翌日には帰国できたが、その間、すでに日本を出国して有効なビザを持っていないこの学生は空港に留め置かれ不安な一日を過ごした。かかった経費は、とりえず留学生後援会で立替払いした。また、メンタルブレイクダウンした留学生が一時帰国したが、その学生に関しても急な帰国だったため必要経費の一部を留学生後援会で貸付けた。

#### 【入国・在留】

インドネシア人留学生から韓国への入国ビザの相談があり韓国領事館に問い合わせた。また、経済的事情で半年間休学した留学生が、在留期間更新にあたり、休学中のアルバイト時間数を気にして相談に来た。経済的事情による留学生の休学は、日本に滞在している場合には不法就労の危険性もあり、大学の管理責任を問われるため、どのように対応すべきが今後の課題である。

#### 【宿舎】

##### 1. 名古屋大学国際交流会館

留学生会館家族室に入居したばかりの学生から、赤ちゃんがいるのに部屋が汚くて不衛生であるとクレームがあった。前入居者がきれいに掃除しなかったため、結果的にはボランティアに掃除をお願いすることになった。また、友人等非居住者を宿泊させたいという希望があったが、規則に従って断った。さらに、レジデンス近くの路上で、夜、ひったくりがあり留学生が被害をうけたため注意喚起を掲示した。

2005年度に向けて、職員宿舎である猪高町宿舎の一部が改修・整備され研究者宿舎として生まれ変わった。空室に留学生を入居させてもらうことにしたため、少し留学生の宿舎状況がよくなった。また、留学生会館の1階のホワイトベア退去後のスペースも留学生が使用できる場所として改修された。

名古屋大学国際交流会館では 緊急に避難場所(シェルター)が必要な事態に陥った留学生に対して、人道的配慮から空室があれば短期間でも入居させている。例えば、一人住まいの女子学生宅への不審者の侵入やストーカー被害、DV など柔軟に対応している。

##### 2. 公営住宅

県営住宅に入居している留学生が一時帰国中に、その部屋から大量のゴキブリが発生したと近所から苦情があり、管理事務所からの連絡で所属の留学生担当教員が母国の留学生と連絡を取り、了解を得て留守宅のゴキブリ駆除が行われた。その経費の支払いが留学生に求められたが、駆除は1回と思っていたところ実際には3回行なわれ、常識的に考えてもかなりの高額だった。留学生は1回分の支払いには同意したが、それ以上は了解していなかったこと、さらに経済力がないため支払いできないと相談があった。交渉の末、かなり減額してもらい不足分は愛知留学生会後援会の「緊急援助金」を申請して何とか支払った。

##### 3. 社員寮

社員寮の入寮生募集の際には面接を行い適切と思われる留学生を推薦し、廉価で安全・清潔な寮で少しでも勉学に専念してもらいたいと思うが、中には勉学をおろそかにする留学生がおり退寮してもらった。「NGK インターナショナルハウスは『スタディールームがありよい論文が書ける』と先輩から聞きました」と言った留学生がいた。

##### 4. 民間アパート等

4月に向けて、プリマベラ5室、ブルーハイツ重の井1室、相生山住宅1室への入居者推薦と契約手続きを行った。いずれも留学生に好意的であり長年にわたってご提供いただいているアパートである。一般の民間アパートの場合には、退去時に高額の請求に驚いた留学生が相談に来るケースが時々ある。家主や仲介の不動産会社に話して、大抵の場合は留学生の立場を理解してもらい、金額を最小限に抑えていただいている。中には大学が機関保証しているため原状回復費用は保険で支払われるとの誤解からしっかり請求してくるところもあったが、これも話して減額してもらった。一方、借主の留学生の水道料金が急に増え、疑念をもった留学生が相談に来たが、水道管を調べても漏水箇所もないため、結局は本人が使用したとしか考えられないケースもあった。理想の宿舎「プリマベラ」に関しては、昨年度に家賃や電気料金未納等、経済的トラブルがあったため今年度から機関保証制度を活用することにし、入居留学生には「留学生住宅総合補償」に加入させた。また家主のご理解をいただいて、建替

えのため4ヵ月間の宿舎を探していた留学生を入居させてもらった。アパートにパラボラアンテナを設置したいという留学生がいたが、ケーブルテレビ事情に詳しい家主や仲介業者が留学生に代わって対応してくださった。

#### 【奨学金・授業料】

国費留学生の奨学金延長申請に関して、志望研究科不合格による延長不可の決定があり、留学生からの相談を受けて出身国大使館に状況を説明した。また、諸機関の合併や大学の法人化の影響もあって4月の国費奨学金の支給が大幅に遅れたため、問い合わせが多かった。国内採用申請結果を不満に思った留学生が文部科学省に直訴の手紙を送ったため、名古屋大学の選考方法を当該留学生に説明した。また、国内採用申請者で採用の可能性が高いことを理由に、当面の必要経費として愛知留学生会後援会事業「緊急援助金」から返済を条件に借金した学生がいた。予想通り国費留学生に採用されたが、あちこちの借金を清算し最終的には半年かかったが完済した。2月から3月にかけては、毎年国内採用の申請結果を聞きに来る留学生が1~2名いる。彼らは何度も何度も相談室に足を運んでくるが、その様子は必死であり、幸い採用されるケースが多いので一緒に喜ぶことができるが、万が一不採用だったらどんなにがっかりするだろうかと思う。国費留学生から支給期間延長申請書に指導教官の印鑑がもらえないと相談があり、当該部局留学生担当教員に事情を尋ね善処を依頼した。

学位取得・卒業を控えた博士後期課程3年の留学生から授業料が支払えないとの相談があり、調べたところ前期の授業料免除許可通知を通年の許可だと勘違いして、後期の免除申請をしなかったことがわかった。日本語能力が原因とも思われるが、いずれにしても本人責任で友人から借金することを助言するしかなかった。中には、どうしても授業料が工面できず未納により除籍された学生もいた。

#### 【医療・健康】

異国での生活は、特に最初の頃はホームシックに罹りやすいが、授業についていけないと落ち込んだ学生が悩んだ末、留学を中断して帰国した。2ヵ月間の日本滞在だった。同じく精神的健康に関しては、心理的原因で長期間不登校の学生がいたり、大学へ来る途中

で一步も前に進めなくなり帰宅してしまう学生がいたり、さらにはDVによる心の傷を抱えていたり、他にもメンタルブレイクダウンを起こした留学生について報告されている。このような精神的問題を抱えた留学生への対応は、1対1でなく周囲の関係者の理解と協力(チームワーク)が大切であるが、それでも当該留学生所属の留学生担当教員の対応への時間や労力、さらには精神的支援には並々ならぬものがあり、担当教員のおかげで状況のさらなる悪化が抑制されたことは事実である。「留学生相談室」に異文化適応を含む留学生のメンタルヘルスを担当する教員を要望しているのはまさにこれら実情への緊急対策であり、留学生を受け入れている大学として当然のことと考えている。

#### 【生活・適応】

ストーカーのように、ここ1~2日車で尾行されていると怯えた様子で留学生が相談に来た。留学生の話ではいつも同じ車が後をつけているとのこと。病院や銀行へ寄ってもいつの間にかまた同じ車が後ろにいると気味悪がっていた。留学生は原付きに乗っていて、バックミラーで尾行する車のナンバーを見ていたため、警察に通報し善処を依頼したところ、結果的には車は警察の車だったことが判明した。ひたたくり犯人に良く似た留学生が疑われていたらしい。警察からは通訳アルバイトを頼まれることもあり、いつもは役に立っているはずの留学生が捜査の容疑者になっているとは想像もしなかった。留学生の恐怖を思うと笑えない笑い話だった。

アルバイトというか地域交流というか2005年の愛・地球博にかかわって、通訳や市民プロジェクト等への留学生の参加協力依頼があった。完全にボランティアというものから、交通費が支給されるもの、報酬が支払われるもの等いろいろだったが、できれば交通費は実費支給してもらいたい。通訳は留学生にとってよいアルバイトであるが、雇用主から留学生の社会人としてのマナーについて苦情が持ち込まれ、留学生に状況説明を求め仲裁したこともあった。

留学生は奨学金や医療費補助の受け取りのため、銀行口座を開設するが、その際、外国人留学生に対しても署名(サイン)ではなく印鑑を使用させたがる日本のやり方には疑問を持った。

留学生の交通事故相談で保険会社との折衝などを相談室が行うことが増えてきている。留学生は自転車で



被害者の場合が多いが、精神的肉体的ダメージが勉学を中断させる結果になるため自転車に乗る時は気をつけることをオリエンテーションで説明している。

留学生の日本での就職に関しては、11月にJAFSA月例研究会「留学生の日本での就職：現状と可能性」、および12月に愛知学生支援コンソーシアム主催「留学生就職支援ガイダンス」が開催され、留学生の就職がやっと問題として認識されたように感じた。また、内定した留学生から日本企業で働くにあたり、ビジネスマナーの講座はないかと問い合わせがあった。

留学生に独自の貸付を行なっている部局があるが、申請後時間がかかりすぎて留学生が困惑・困窮しているため当該部長に連絡し担当職員に注意してもらったこともあった。また、地域のボランティアが留学生にお金を貸したが、留学生と連絡が取れなくなったことを心配した貸主が相談室に連絡してきたこともあった。これは留学生が一時帰国していたことが判明して解決した。

留学生後援会の一事業として貸付金制度があるが、返済期限切れの留学生に連絡して早く返すよう注意した。留学生は返済したが、年度末には授業料未納により除籍となり気の毒だった。元国費留学生が留年などで私費留学生になった場合、収入の激減と生活レベルがアンバランスであり、経済的破綻をきたすケースが時々見られるため、奨学金を受給している期間にきちんと修了できるよう頑張ってもらいたい。

#### 【家族】

「家族呼び寄せ」の在留資格認定証明書交付が立て続けに不許可になり、理由を入国管理局に問い合わせたが、「個人的に来てもらえば話します」とのこと



家族の日本語コース「日本の文化 きもの」



家族の日本語コース「日本の文化 おりがみ」

実際のところは不明のままであったが、配偶者が母国で就労していることが原因らしいと耳にした。また、夫婦ともに留学生の二人から、母国で生まれた赤ちゃんを急いでいたので在留資格「短期滞在」で連れて来てしまったが在留資格「家族滞在」に変更できるかという相談もあった。名古屋栄ライオンズクラブから支援をいただいている留学生の家族のための日本語コースは、前期受講生25名、後期受講生47名であり、支援開始の1994年秋から延べ人数にして1,109名の留学生家族がその恩恵に与った。12月1日のライオンズクラブ例会では崔美那さん（韓国）と陳新さん（中国）が日本語でスピーチして日頃の学習成果を披露した。毎年出席させていただいているこの例会でのスピーチは、受講生にとって晴れ舞台であり、その準備に対する努力を評価したい。また、「ひろば」というグループが、留学生家族の日本語コース受講中のベビーシッターサービスを担当し、授業の前後に受講生と日本語でおしゃべりする時間を設けて学習した日本語の活用を支援している。授業最終日は、「日本の文化紹介」ということで、地域のボランティアの方々の協力を得て「おりがみ教室」と「着物着付け教室」を開催し好評だった。「家族の日本語コース」の受講生（留学生の配偶者）が入院したが、その際は日本語教師が病院へ何度も足を運んでくださるなど献身的なお世話をいただき大変有難かった。

#### 【地域・交流】

地球家族プログラムは、心機一転して、学内教職員にホストファミリーを呼びかける案内文書を作成し、年度末に全教職員に配布した。地球家族プログラムでは、ホームステイ、ホームビジットの紹介だ

けでなく、合気道教室（通年）、おにぎり講習会（10月）、しめなわ講習会（12月）等も行っている。ホームステイに参加した留学生からはとても楽しかったと感謝の言葉があった。

トヨタ自動車（株）主催「トヨタ見学会」を8月、11月、3月に実施した。11月の第2回目はトヨタ自動車の都合でキャンセルされたため、代替案として留学生センターの学生（6ヶ月コース、1年コース）とNUPACE生に対して、日程を変え二日間にわたって見学会を実施していただいた。また、医学部から8月の見学会に医学研究科のYLP生全員を参加させたいという希望が出たため、7月中旬にYLP生のみを見学会を別途実施していただいた。3月の見学会は、11月に2回実施したこともあり、留学生からの参加が少なかったため、留学生家族の日本語コースから約10名参加することができた。結局、名古屋大学の留学生に対して5回実施していただいたことになった。

いけばな教室は、未生流加藤千鶴子先生のご好意により、月1回水曜日の昼休みに留学生センターで開催していたが、10月が台風で中止になった後、担当職員が退職し水曜日開催が困難となって中断したままである。4月に留学生センターラウンジで開催したときには、NUPACEの学生を中心に14名の留学生の参加があり賑わった。新入留学生を歓迎する意味でこれら留学生のいけばな作品展を2日間開催したが、ラウンジが華やかだった。

名古屋栄ライオンズクラブから留学生図書継続支援の打診があり中央図書館に照会し、2004年度は30万円、翌年から20万円分の図書を寄贈していただけることになった。これらの寄贈図書は中央図書館の「留学生コーナー」に配架された。

小中学校の国際理解教育への留学生派遣については、「留学生相談室」で担当している。ここでは担当者（白石慶子）からの報告を記載する。後述の教育交流部門資料 地域社会と留学生の交流 も参考にしてもらいたい。

地域の小中学校や地域団体から国際理解教育を目的とした留学生の派遣依頼が月1～3件の割合で寄

せられた。これは2005年3月から9月まで開催される「愛・地球博」によるところが大きいだろう。留学生にとっては自分の生まれ育った国を多くの人に紹介できる機会であるだけでなく、日本の社会に対して何らかの貢献をしているという達成感や満足感を得られる機会になっているようだ。ひとたび派遣された留学生は、その後も国際理解教育に積極的に関わろうとして、その後何度か交流活動に出向く傾向がある。これは大変喜ばしいことなのだが、その一方で国際理解の授業に慣れていない、あるいは国際理解の授業を初めて行う学校の中には授業の内容について十分な検討がなされていない印象を受けたところもあった。依頼者が留学生に何を求めているのかが見えないことも多く、実際留学生から何をすればいいかわからないといった話も多く寄せられた。依頼者には留学生の熱意や能力を十分に発揮できるような授業内容を検討していただくと同時に、依頼者のニーズに的確に応えられるような下準備ができるように留学生にも働きかける必要があるだろう。「留学生相談室」は両者のコーディネータとして、実のある国際理解教育を行えるようにサポートしていきたい。

独立行政法人日本学生支援機構から留学生地域交流事業の相談があり、事業「児童養護施設の児童と留学生のこころの交流と思い出づくり」を企画、実施した。名古屋市内外の2施設への訪問交流に多くの留学生が応募、参加した。現実社会の厳しさを体験し、親と一緒に暮らせない子どもたちにより多くの笑顔を与え、多様な楽しみを体験させ、さらには日本留学という大きな目標を達成した留学生の「夢」を話してもらうことで異文化体験とともに希望や夢を持って強く育ててほしいと願うものである。一方、留学生にとっても、経済先進国の先進的な面を勉強するだけでなく現実社会に触れることは人間的成長につながると期待している。留学生の心の豊かさが子どもたちを自然に受け入れ、子どもたちのこころを温かく包むこの活動を広げていきたいと考えている。

愛知留学生会後援会では、留学生支援として「緊急援助金」事業を行っている。これは、留学生に理解のある地域の篤志団体からの寄付によって運営さ

れているもので、『緊急』に経済的困難に陥った私費留学生に対して援助金を支給している。一人当たりの支給金額はそれほど多くないが、実質的に経済的困難を軽減することはもちろんであるが、むしろ留学生からのお礼状によれば「助けてくれる人がいる」「自分は一人じゃない」と感じて、もう一度頑張ってみようという前向きの気持ちを引き出すなど精神的支援の役割を果たしている。この事業は愛知県内の大学を対象に行われているが、2004年度は15大学35名に対して総額231万円が支給された。うち名古屋大学の留学生は17名であった。

愛知県観光協会が留学生に対し愛知の観光ツアーを毎年実施しているが、2004年度は中部国際空港の開港を待って3月はじめに実施された。

#### 【人間関係】

卒業した元留学生から留学期間中における指導教官の言動に起因する教育責任に関して賠償請求があった。関係者間で話し合ってきたが、指導教官が定年退職し未解決のままである。能力、人格ともに優秀な学生だっただけに過去に固執していることが残念にも思える。

#### 【NUFSA・留学生会】

名古屋大学留学生会（NUFSA）の2004年度の会長は、教育発達科学研究科の武小燕さん（中国）だった。彼女はNUFSA役員とともに4月と10月のバザー、6月の名大祭、9月の新潟大学留学生会との交流会等を行なった。名大祭では、「Performance for peace」をテーマとして民族衣装でのお国紹介に加え、ドイツ平和村への寄付金を集めて留学生が発信する世界平和への願いとして新聞にも報道された（2004/05/28中日新聞）。

名古屋地域中国人留学生学友会の2004年度の会長は、工学研究科の馬翔さんだった。10月1日には、中華人民共和国建国55周年を祝って「日中友好感謝と記念の集い」が名古屋市公会堂で開催され、中国人留学生を支援してきた55名の市民に感謝状が贈られた。名古屋大学で長年留学生相談業務を担当してきた筆者（松浦）もその荣誉に与り、歴代会長から手渡される感謝状を中国人留学生に関わるすべての



愛知留学生会「第40回留学生の夕べ」

関係者の代表として受け取った。

インドネシア留学生会の2004年度の会長は、工学研究科のエフェンディさんだった。2004年12月26日のスマトラ沖大地震と巨大津波の被害者支援のため、インドネシア留学生会は街頭募金を行い、さらに2005年2月28日に「被災者支援を考える会」を開催した。

愛知留学生会（AFSA）の2004年度の会長は、名古屋大学工学部のニルマル・メータさん（タンザニア）で、副会長は名城大学のアスタさん（ネパール）だった。愛知留学生会後援会、ACEなどとの合同会議を年数回行い、5月のリトルワールドでの新入留学生歓迎会、11月の富士山へのバス旅行、12月の「留学生の夕べ」、2月のAFSA役員歡送迎会が定番化してきたが、いずれも役員たちは忙しい勉強の合間をぬってよく頑張ってくれた。特に「留学生の夕べ」は日本人と留学生の約500名が交流を楽しんだ。

#### おわりに

2004年度は「留学生の就職」がクローズアップされた年だったとも言える。日本の少子化、あるいはグローバル化で日本語が理解でき、日本人や日本社会を多少なりとも理解している留学生が優良な人材として注目され始めた。特に愛知県では、この地域で学んだ留学生を東海地域の産業発展のために定着させたいという希望もあり、12月、初めて愛知学生支援コンソーシアム主催の「留学生就職支援ガイダンス」が開催された。2005年度には愛知県が国際交流大都市圏構想絡みで留

学生向けの企業説明会的事業を企画・予定している。一方で、留学生も日本の企業で働くための就職活動のノウハウやビジネスマナーを含む社会人としての心得を習得したいと考えるようになっている。日本社会で外国人雇用が進めば職場や地域での異文化衝突は避けられないと思うが、それは別の視点から見れば日本人の国際化のために大いに奨励したいことでもある。さ

らに、外国人従業員がいるということは、当然彼らの子どもたちの教育に関する問題も起きてくる。日本の学校教育における教育体制の柔軟性、日本人と同様にあるいはそれ以上の教育を受けることができる体制が求められている。いろいろな面で開かれた日本が期待されている。